

体育授業における子どもの感情に関するレビュー研究

今野慶伍¹⁾²⁾, 黒川修行¹⁾, 川戸湧也²⁾³⁾

Review research on children's emotions in physical education classes

Keigo KONNO¹⁾²⁾, Naoyuki KUROKAWA¹⁾, Yuya KAWATO²⁾³⁾

Abstract

The educational environments of school children have become more diverse and complex in recent years. It is essential to explore ways of conducting physical education classes suited to each child's circumstances. At the same time, it seems necessary to aim for physical education classes to be a way for all children to enhance their sense of physical competence and recognize each other, regardless of their strengths and weaknesses in sports or their likes and dislikes. This study aims to organize previous research on "children's emotions in physical education classes" and clarify the current issues.

To collect papers, we used "CiNii Research" to search for research with "text link available" using the keywords "sense of physical competence physical education". From the research found in the search, 167 academic papers published in academic journals and proceedings of universities and research institutes were extracted. Next, 76 papers were extracted based on this study's academic paper selection criteria. Most of these papers were published in journals of universities or research institutes, and only 12 were published by major academic societies. In addition, the other papers were organized by school type, grade level, gender of participants, changes in the papers, and the events implemented in each school type.

It was confirmed that the papers compiled through this study had limited research subjects and teaching materials. Most events implemented were in elementary schools, with the majority being ball games, and the number of events was similar for junior high schools. There was little practice of so-called individual events such as swimming or martial arts, and interactions with groups or others are considered influential factors in enhancing a sense of athletic competence.

In the future, it will be necessary to expand the scope of the survey and investigate the relationship between a sense of athletic competence and different events. This study will likely lead to considering new lesson design methods and teaching methods for future physical education classes.

Key words : physical education, sport competence, category of school

キーワード : 体育, 運動有能感, 学校種

1) 宮城教育大学大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻

〒980-0845 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 149 番地.

2) 仙台大学

〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南二丁目 2 番 18 号

3) 三重大学 教育学部

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

1. 背景および目的

日本の体育・スポーツ方針は、第3期スポーツ基本計画によって定められ、子供や若者の日常的な運動習慣の確立と体力の向上の施策目標が示されている（スポーツ庁、2022）。「体育・保健体育の授業等を通じて、運動好きな子供や日常から運動に親しむ子供を増加させ、生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力（いわゆる「フィジカルリテラシー」）の育成を図る」とされる。

体育の授業は、小学校・中学校では平成29年に、高等学校では平成30年に改訂された学習指導要領のもと、現在行われている。体育の目標には、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成していくこと（小学校学習指導要領解説、2016、p.17）が示されているように、体育での学びは、豊かな生涯を送るための重要な基礎となることが窺える。また、体育を通して様々な運動やスポーツに触れることができるため、新しい趣味が生まれたり、アスリートを目指すようになったりすることも考えられる。体育によって、豊かな生涯を送るための選択肢の幅を広げられるようになるのではないだろうか。

しかし、社会構造の変化やテクノロジーの進歩が目まぐるしい現代において、子どもたちのおかれる教育環境は、多様化・複雑化（文部科学省、2015）しているのが現状である。子どもたちの状況を踏まえ、学校環境に適応したより良い体育授業の在り方を探っていく必要があると考えられる。北ら（1995、p18）によれば、身体的有能感と授業評価との関係を調査することによって、生徒の身体的有能感を高めることが、授業をよりよい方向へ改善することになると報告している。岡沢ら（1996）は、運動有能感が「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の3因子で構成されていることを明らかにした。体育授業に関してみると、運動の苦手な男子、仲間付き合いの下手な女子は、体育の授業時間を苦痛に思っている可能性があり、体育授業を行う上で十分注意しなければならない点であると指摘している。体育授業が運動の得意不得意や好き嫌い、性別等によって差別されることはあってはならない。全ての子どもたちが運動有能感を高められ、お互いに認め合えるような体育授業を目指していくことが必要だと考えられる。

そこで、本研究では「体育授業における子どもの感情」に関する先行研究を整理し、現状の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 論文の収集と研究対象の選定

先行研究に関する論文の収集は「CiNii Research」を用いて「運動有能感」「体育」をキーワードに「本

文リンクあり」の研究を検索した。検索して得られた研究から、学術誌（学会誌）と大学・研究所等の紀要に掲載されている学術論文を抽出した（参照日：2024年11月8日）。抽出された学術論文について、次の基準を設定し、本研究の対象となる論文を選定した。基準は、①日本における体育授業を対象とした研究であること、②小学校、中学校および高等学校の生徒を対象とした研究であること、③授業づくり、教材づくりもしくは実践報告に関する研究であること、の3つを条件とした。なお、学会大会の抄録や予稿集等のみに示された研究は、本研究では対象外とした。

上記の手順で「運動有能感」「体育」をキーワードとして検索したところ、167件の研究が抽出された。さらに、本研究の選定基準に適合する論文を選定したところ、76編の論文を抽出することができた（資料.1および2）。

2.2 論文が掲載された学術誌の整理

本研究で対象とした論文は、掲載された学術誌ごとに整理した。ここでは、各大学および研究機関の紀要をそれぞれ整理せずに、「紀要」として扱った。

2.3 論文の種別

本研究の対象とされた論文を、各論文の目的、方法、対象者等をもとに、類似する論文をまとめて、学校種別に整理した。また、それぞれを学年・性別ごとに整理した。なお、本研究ではひとつの論文につき、ひとつの学校種に当てはめて検討することとした。さらに、学校種ごとに実施された種目を整理した。

2.4 論文の変遷

本研究で対象とされた論文は、小学校、中学校および高等学校の生徒を対象とした体育の授業に関する論文であることから、論文の発行時期が、学習指導要領改定の影響を受けていると推測する。そこで、本研究の対象とされた論文を、文部科学省（2011）および川戸（2023, p8-9）の先行研究を参考に、学習指導要領改訂の時期を考慮した5つの区分に整理した。5つの区分とは、第一期：1977年～1988年、第二期：1989年～1997年、第三期：1998年～2007年、第四期：2008年～2016年、第五期：2017年～である。また、論文の研究対象も合わせて整理し、学習指導要領改訂の時期と比較した。

3. 結果および考察

本研究では「運動有能感」「体育」をキーワードに独自に設定した選考基準のもと、76編の先行研究

を整理した。

3.1 対象論文の掲載された学術誌について

「運動有能感」「体育」をキーワードに抽出された論文は掲載学術誌ごとに整理した（表 1）。最も多かったのは、スポーツ教育学研究で 3 編であった。次いで、体育学研究と北関東体育学研究が 2 編ずつ、臨床教科教育学会誌、人間環境学研究、年会論文集、日本教科教育学会誌および体育科教育学研究がそれぞれ 1 編であった。この他、学術雑誌が 3 編、各大学もしくは研究機関の紀要が 61 編の掲載であった。

表 1. 対象論文が掲載された学術雑誌および紀要とその掲載数について

学術雑誌	掲載数
スポーツ教育学研究	3
体育学研究	2
北関東体育学研究	2
臨床教科教育学会誌	1
人間環境学研究	1
年会論文集	1
日本教科教育学会誌	1
体育科教育学研究	1
その他	3
各大学/研究機関の紀要	61
合計	76

3.2 研究対象となった学校種について

本研究で抽出された 76 編の論文を研究の目的、研究方法の観点から整理した結果、4 つの研究対象（表 2）に整理することができた。整理された 4 つの研究対象となった学校種の区分は「小学校」「中学校」「高等学校」「学校種を跨いだ研究」であった。

表 2. 研究対象となった学校種について

研究対象	掲載数
小学校	46
中学校	22
高等学校	5
学校種を跨いだ研究	3
合計	76

小学校における研究は、本研究で抽出された論文のなかで最多となる 46 編の論文が該当した。これらの論文を学年別に整理したところ、5 年生を対象とした論文が最も多く 10 編、次いで 4 年生が 7 編、6 年生が 6 編、3 年生が 4 編、2 年生が 3 編、1 年生が 2 編であった。2 学年ごとにまとめると、高学年で 16 編、中学年で 11 編、低学年で 5 編となった。また、複数学年を対象となる研究論文が 13 編あった。これらの論文では、低学年での実践が少ないことの他に、小野ら (2020) による小学生の運動有能感を測定する尺度の開発を目的とした研究や村瀬ほか (2013) の運動有能感尺度を用いた研究等、質問紙調査による研究が多くみられた。なお、学年が不明である研究も 1 編確認された。

中学校での研究では、22 編の論文が該当した。2 年生を対象にした研究が 9 編と最も多く、1 年生が 5 編、そして 3 年生が 4 編であった。また、複数学年を対象とした研究に関する論文が 4 編あった。岡澤ら (1999) によって、中学 2 年生の男女を対象にしたスポーツチャンバラの有効性が検討されていたが、近年、武道を取り扱った研究は認められなかった。小学校での研究と比較すると、中学校を対象とした研究は少なく、今後の知見の蓄積が必要であると考えられた。

高等学校での研究には、5 編の論文が該当した。学年別で見ると、1 年生を対象とした研究が 1 編、1,2 年生が 1 編、1~3 年生が 2 編、学年が不明である研究が 1 編であった。そのうち、授業実践による研究はわずか 1 編であり、女子のみを対象としたバスケットボールの授業であった。運動有能感を高めることを意図した授業実践を行い、その授業における効果の検証が目的とされていた(木村ほか, 2022)。他の 4 編は質問紙調査によるものであった。

これらの上記の研究対象に該当しない 3 編の論文を「学校種を跨いだ研究」として整理した。當山ら (2022) は、小学 5,6 年生・中学 1 年生を対象に、運動有能感と体育授業における回避的態度の因果関係を検討している。上野ら (2011) は、小学 1~6 年生・中学生を対象に、新体力テストと運動有能感の調査結果から、体力と運動有能感の関係について検討している。大場 (2010) は、中学 1~3 年生・高校 1,2 年生を対象に、体育授業の学習意欲に関する様々な心理的要因について、心理的現象プロセス

のもと、構成因子の抽出及び因子構造の検討を行っている。

上記に示した結果の通り、論文の多くは小学校の生徒を対象としており、中学校および高等学校の生徒を対象とした研究が少ない。また、小学校を学年別に整理すると低学年での研究が少ない傾向にあることから、学校種や学年を問わず多くの実践が必要であると考えられた。

3.3 性別について

本研究で抽出された76編の論文について、研究対象および研究対象者の性別に整理した(表3)。その結果、小学校では、男女を対象とした研究が38編、性別を確認できなかったものが4編であった。中学校では、男女を対象とした研究が16編、男子を対象とした研究が3編、性別を確認できなかったものが2編であった。高等学校では、男女を対象とした研究が3編、女子を対象とした研究が1編、性別を確認できなかったものが1編であった。

表3. 研究対象者の性別について

研究対象	男女	男子	女子	不明
小学校	38	0	0	8
中学校	16	3	1	2
高等学校	3	0	1	1
学校種を跨いだ研究	3	0	0	0
合計	60	3	2	11

加藤ら(2021)のコーフボールを教材とした研究では、実践を通して女子の身体的有能さの認知と統制感が向上し、身体的有能さの認知、統制感、受容感の男女差が解消傾向にあった。また、特に女子の運動有能感を向上させ、その男女差を解消させるために有効である種目はボールゲームである可能性が指摘されている。安井ら(2021)のフラッグフットボールを教材とした研究では、事前調査において、男子に比べ、女子で運動に対する抵抗感があり、運動が嫌いであったり、不得意であったりする報告が示されていた。授業を通して、フラッグフットボールが運動有能感に影響を与えることはできなかったが、女子生徒にプラスの影響を与えられたことを報告している。

このようなことから、性別や能力差を問わず、誰もが楽しめるような体育授業の在り方について検討していくことが今後の課題であることが改めて確認できた。子どもたちの実態を踏まえ、体育授業で取り扱われるスポーツを工夫し、既存の教材に捉われない新たな教材の開発を目指す必要があると考えられる。

3.4 学校種ごとに実施された種目について

本研究で抽出された76編の論文について、実践されていた種目（質問紙調査や新体力テストを除く）を学校種別に整理した（小学校 表4, 中学校 表5, 高等学校 表6）。ここでは、ひとつの学校種の中で、複数種目実施されているものも多くみられたため、回数の合計は、抽出した76編の論文数とは異なる。また、学校種を跨いだ研究については、質問紙調査や新体力テストによる報告であったため、ここには含めなかった。

表 4. 実施された種目について(小学校)

種目	回数
球技（フットサル, フラックフットボール等）	24
器械運動	15
体づくり運動	10
陸上運動（リレー, ミニハードル等）	12
水泳	1
リズムダンス	1

表 5. 実施された種目について(中学校)

種目	回数
球技（フットサル, タグラグビー, バレーボール等）	9
陸上競技	4
器械運動	3
水泳	3
体づくり運動	2
スポーツチャンバラ	1
ダンス	1
体育理論	1

表 6. 実施された種目について(高等学校)

種目	回数
バスケットボール	1

整理された種目数を見ると、学校種を問わず球技系の種目が最も多く、次いで小学校では器械運動、中学校では陸上競技が多くなっている。しかし、球技系の種目と比較すると、個人種目とされる器械運動や陸上競技の数は少なく、その他の水泳、ダンスや武道の種目に関しては極めて少ない。これらの論文はどの学校種においても教材が限定的で種目数に偏りが見られることを示している。

今後は、特に水泳、ダンスや武道の実践の報告が期待される。個人種目においても、他者との協力を通して運動有能感を高めながら、お互いに認め合えるような体育授業の構築が目指されるべきであろう。

3.5 論文の変遷について

抽出された76編の論文の変遷について、学習指導要領改訂の時期を考慮した5つの時期に整理した。しかし、第一期(1977年～1988年)、第二期(1989年～1997年)に該当する論文を見出すことはできなかった。そこで、第三期(1998年～2007年)から第五期(2017年～)までを表7に整理した。

表7. 研究対象の学校種と論文の発刊時期について

研究対象	第三期	第四期	第五期	合計
	1998～2007年	2008～2016年	2017年～	
小学校	2	24	20	46
中学校	2	5	15	22
高等学校	0	1	4	5
学校種を跨いだ研究	0	2	1	3
合計	4	32	40	76

岡沢(1996)によって、運動有能感の尺度が採用されたため、第四期に入り、論文数が増加している。第五期では、小学校こそ第四期の研究数に満たないものの、中学校、高等学校の研究数が、それぞれ3倍、4倍となる量であったことから、今後、さらなる研究の蓄積が見込まれる。

第三期では、ゆとりある教育活動の中で、生きる力をはぐくむことが重視され、総合的な学習の時間が創設されたほか、各教科において体験的な学習や問題解決的な学習の充実が図られた(文部科学省, online)。ここでは、4編の論文が該当し、体育授業で望む生徒の評価法(岡澤ほか, 2003)や体育授業における自尊感情の関わりを分析した研究(賀川ほか, 2003)が報告されている。

第四期では、生きる力の育成、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスが重視され、授業時数が増加し、道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること

が目指された（文部科学省, online). 32 編の論文が該当し OPP を活用した授業実践（西口ほか, 2015）や「体育における学習意欲向上プログラム」（高橋ほか, 2010）などが報告されている。

第五期では、社会に開かれた教育の実現を目指し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの資質・能力の育成が掲げられ、主体的・対話的で深い学びが重視されている（文部科学省, online). ここでは、40 編の論文が該当し、インクルーシブ体育の視点から考えた水泳授業（信原ほか, 2023）やタグラグビーを導入し有効性を示した研究（隈本, 2019）などが報告され、学習指導要領改定による影響を受けているものであると確認された。

4. まとめ

本研究の目的は「体育に対する子どもの感情」に関する先行研究を整理し、現状の課題や今後の研究で取り組みが期待される点について検討することであった。上記の目的を達成するために、本研究では「運動有能感」「体育」をキーワードに独自に設定した選考基準のもと、76 編の先行研究について整理した。

学校種ごとに実施された種目を整理したところ、小学校を対象とした論文・実践が多く報告されていた。また、小学校および中学校において、球技系種目の授業回数が最も多く、教材が限定的であることが確認された。さらに、性別ごとに各論文・実践を整理した結果、教材によって性差に関係なく運動を楽しむことができるようになることが報告されていた。

5. その他

本研究の一部は、令和6年度東北体育・スポーツ学会にて発表した。また、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項は存在しない。

参考文献

加藤凌・佐藤善人（2021）男女の実質的平等の実現を目指す小学校体育授業におけるコーフボールに関する一考察：ゲームにおける触球数・シュート数の実態と運動有能感の変容に着目して。東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系, 73 : 227-241.

北真佐美・岡沢祥訓・森田美穂（1995）体育授業における生徒の身体的有能感と授業評価との関係。奈良教育大学教育研究所紀要, 31 : 15-23.

- 賀川昌明・横田直樹（2003）小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連. 鳴門教育大学研究紀要, 18 : 9-18.
- 川戸湧也（2023）わが国の柔道授業に関する研究の類型化と変遷から見た課題と展望. 体育科教育学研究, 39 (1) : 1-13.
- 木村郷・益川満治・宍倉慎次（2022）高等学校におけるゴール型：バスケットボールの授業実践—運動有能感に着目して—. クロスロード：弘前大学教育学部研究紀要, 26 : 61-67.
- 隈本真（2019）中学校保健体育科におけるタグラグビーの導入—運動有能感に着目して—. 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報, 9 : 161-162.
- 村瀬浩二・梅澤秋久・安部久貴（2013）小学校体育授業において教師に望まれる行動：運動有能感との関連による検討. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 63 : 17-25.
- 文部科学省（2015）第1章 時代の変化に伴う学校と地域の在り方について. 文部科学省,
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364824.htm, (2025年2月10日参照).
- 文部科学省(2011)学習指導要領の変遷. 文部科学省,
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/1304360_002.pdf, (2024年1月26日参照).
- 文部科学省（online）学習指導要領改訂の考え方. 文部科学省,
https://www.mext.go.jp/content/1421692_6.pdf, (2024年1月29日参照).
- 文部科学省（2011）学習指導要領等の改訂の経過. 文部科学省,
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304372_001.pdf, (2024年1月29日参照).
- 文部科学省（online）幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント. 文部科学省,
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf, (2024年1月29日参照).
- 信原智之・藤井華香（2023）インクルーシブ体育の視点から考える水泳の授業：水中での多様な移動の仕方を考える活動やダンススイミングの活動を通して. 中等教育研究紀要 広島大学附属福山中・高等学校, 63 : 71-78.

- 西口舞・池田拓人（2015）ポートフォリオを活用した小学校体育授業の実践：運動有能感に及ぼす影響に着目して．和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，25：113-120.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究．スポーツ教育学研究，16（2）：145-155.
- 岡沢祥訓・柳沢隆裕・有馬一彦・本井健一郎（2003）運動有能感を高める評価法に関する研究．教育実践総合センター研究紀要，12：163-167.
- 岡沢祥訓・辰巳喜之・竹住和宏・河野成伸（1999）体育授業におけるスポーツチャンバラの有効性の検討．教育実践研究指導センター研究紀要，8：81-88.
- 小野雄大・梶将徳（2020）日本の小学生の運動有能感尺度の開発に関する研究．体育学研究，65：1015-1027.
- 大場渉（2010）体育における学習意欲プロセスモデルの検討．日本教科教育学会誌，33（3）：21-30.
- 小学校学習指導要領解説（2016）小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編．文部科学省，
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf, p17, (2023年10月30日 参照).
- スポーツ庁（2022）スポーツ基本計画．
https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf, (2023年10月30日参照).
- 當山貴弘・中須賀巧・杉山佳生（2022）体育授業における運動有能感と回避的態度との因果関係の推定．体育学研究，67：897-914.
- 上野耕平・関耕二（2011）性および発達差が児童・生徒の体力と運動有能感の関係に及ぼす影響．山陰体育学会，26：13-18.
- 安井仁・戸井有希（2021）サッカーにおける「できる」ための「わかる」を意識した授業づくり：フットサルサッカーの授業実践を通して．鳥取大学附属中学校研究紀要，52：112-120.

(2025年4月14日受付 / 2025年6月16日受理)

資料2. 今回抽出された論文の出典について

- 1) 財津藍, 日高正博, 佐々敬政, 後藤幸弘. ハードル走の実技と知識の学習を関連させたアクティブ・ラーニングによる授業の成果. 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集. 2024;10(2):No. 5.
- 2) 岡広子, 石塚諭, 石井幸司. 中学校体育授業における教師の言葉がけに関する事例的研究 —運動有能感の差異に着目して—. 宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第1部. 2024(74):117-34.
- 3) 山口健斗. 運動有能感を高める中学校保健体育科における授業実践: ICT機器の活用を通して. 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報. 2024(14):279-80.
- 4) 岩井仁美, 山坂明, 関耕二. マット運動における学習意欲を高めるための「やりくり」授業の開発. 鳥取大学附属中学校研究紀要. 2024;55:109-14.
- 5) 町村雄太. 小学校体育科授業における運動有能感を高める授業実践研究. 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報. 2024(14):271-2.
- 6) 渡邊裕樹, 江藤真生子. シンクロマットを取り入れた小学校体育の授業実践. 臨床教科教育学会誌. 2023;23(1):19-32.
- 7) 小西翔太, 上原禎弘. 小学校体育授業における運動有能感の下位児に関する事例的検討. 兵庫教育大学学校教育学研究. 2023;36:175-88.
- 8) 鬼澤陽子, 小松崎敏, 森川美也, 島孟留, 大橋涼子, 千木良厚, et al. 小学校低学年の体育授業において再適用した運動有能感を高める指導方略の有効性の検討: 2年生のボール投げ単元を対象に. スポーツ教育学研究. 2023;43(1):1-12.
- 9) 信原智之, 藤井華香. インクルーシブ体育の視点から考える水泳の授業: 水中での多様な移動の仕方を考える活動やダンススイミングの活動を通して. 中等教育研究紀要/広島大学附属福山中・高等学校. 2023;63:71-8.
- 10) 中須賀巧, 田中輝海, 阪田俊輔, 大橋充典, 山本浩二, 杉山佳生. 中学校体育授業における運動有能感と学習不安との関係: 2波のパネルデータによる因果関係の検討. 健康科学. 2023;45:61-8.
- 11) 山坂明, 岩井仁美, 関耕二. 水泳における学習意欲を高めるための「やりくり」授業の開発: 運動の試行錯誤からの学び. 鳥取大学附属中学校研究紀要. 2023;54:115-21.
- 12) 山本篤司, 中須賀巧, 筒井茂喜. 熟達雰囲気のある体育授業が運動有能感及び消極・回避的行動に及ぼす影響: 中学1年生男子を対象として. スポーツ教育学研究. 2022;42(2):33-51.
- 13) 鬼澤陽子, 野村充, 森川美也, 千木良厚, 島孟留, 小松崎敏. 小学校低学年の体育授業における運動有能感を高める指導方略の有効性の検討: 運動有能感とゲーム中の状況判断力との関係に着目して. スポーツ教育学研究. 2022;42(2):19-31.
- 14) 木村郷, 益川満治, 宍倉慎次. 高等学校におけるゴール型: バasketボールの授業実践 — 運動有能感に着目して —. クロスロード: 弘前大学教育学部研究紀要. 2022;26:61-7.
- 15) 岩井仁美, 安井仁. 試行錯誤しながら学ぶ「陸上競技リレー」授業: 運動に消極的な生徒に注目して. 鳥取大学附属中学校研究紀要. 2022;53:105-8.
- 16) 當山貴弘, 中須賀巧, 杉山佳生. 体育授業における運動有能感と回避的態度との因果関係の推定. 体育学研究. 2022;67(0):897-914.

- 17) 加藤凌, 佐藤善人. 男女の実質的平等の実現を目指す小学校体育授業におけるコーフボールに関する一考察: ゲームにおける触球数・シュート数の実態と運動有能感の変容に着目して. 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系. 2021;73:227-41.
- 18) 砂川力也, 古謝佑汰, 高原安貴, 三井綾乃. 子どもの健康支援活動に貢献する人材育成に向けた取り組み: 島嶼地域の小学校を対象にした教育実践. 琉球大学教育学部紀要=Bulletin of Faculty of Education University of the Ryukyus. 2021(99):69-84.
- 19) 宮尾夏姫, 大友智, 深田直宏, 吉井健人, 南島永衣子. 小学校高学年の体づくり運動領域を対象とした体育授業プログラムの効果の検討—児童の授業評価に及ぼす効果に着目して—. 次世代教員養成センター研究紀要 = Bulletin of Teacher Education Center for the Future Generation. 2021;7:37-46.
- 20) 安井仁, 戸井有希. サッカーにおける「できる」ための「わかる」を意識した授業づくり: フラッグサッカーの授業実践を通して. 鳥取大学附属中学校研究紀要. 2021;52:113-20.
- 21) 松田広, 野口基勝. 高等学校における運動有能感に着目した体育科と普通科に関する一考察—都道府県別の体育科を設置している高等学校に着目して— (原著論文). 福祉健康科学研究. 2021;16:191-8.
- 22) 村瀬浩二, 古田祥子. 勤勉性と運動有能感の因果関係の検討: 小学校ボール運動単元を対象として. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学. 2021;71:1-9.
- 23) 宍戸隆之, 橋元真央. ICT を活用して運動有能感を高める体育の実践研究. 人間環境学研究. 2021;19(1):51-8.
- 24) 菊池はるひ, 清水将. ゴール型への接続を意識した運動有能感を高める鬼遊びの教材開発. 岩手大学大学院教育学研究科研究年報. 2020;4:237-48.
- 25) 芳賀紀昌. 運動有能感を高め、自らの課題を意欲的に追求する生徒の育成—熟達目標を柱にした課題追求サイクル型体育の授業づくり—. 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集. 2020;11:371-80.
- 26) 松田広, 古明地那悠, 桑名圭司. 高等学校における運動有能感に着目した体育科と普通科委に関する一考察—複数の高等学校を対象に—. 福祉健康科学研究. 2020;15(1):53-60.
- 27) 西連寺太志, 渡邊將司. 運動することの楽しさや喜びを味わわせ運動有能感を高める体育科学習指導法の在り方— 第5 学年「体の動きを高める運動」における, 「わかる」「できる」「かかわる」を保証した学習過程・「つながる」教材の工夫を通して—. 茨城大学教育学部紀要 (教育科学). 2020(69):115-28.
- 28) 小野雄大, 梶将徳. 日本の小学生の運動有能感尺度の開発に関する研究. 体育学研究. 2020;65(0):1015-27.
- 29) 隈本真. 中学校保健体育科におけるタグラグビーの導入— 運動有能感に着目して—. 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報. 2019(9):161-2.
- 30) 松田広, 橋本真理子, 古明地那悠. 高等学校における運動有能感に着目した普通科と体育・スポーツコースに関する一考察 (原著論文). 福祉健康科学研究 = Journal of Wellbeing Science. 2019;14(1):93-100.
- 31) 當山貴弘, 中須賀巧. 中学生の体育授業における日標志向性について—運動有能感得点と劣等コンプレックス得点の比較. 兵庫教育大学学校教育学研究. 2018;31:33-8.

- 32) 高瀬淳也, 中島寿宏. 運動・体育に対するへき地小規模校という環境の影響. 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要. 2018;5(0):23-8.
- 33) 水下裕斗. 運動有能感を高める体育授業の指導過程の研究 - 球技ネット型において「体ほぐしの運動」を取り入れた実践 - . 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報. 2018(8):65-6.
- 34) 森知高, 小林真一. 運動有能感を高め, 体力向上を図る体育科指導の工夫: めあての設定の工夫と個人種目の集団ゲーム化を通して. 福島大学人間発達文化学類論集. 2017;25:49-62.
- 35) 村瀬浩二, 小坂竜也. 小学校体育科ゴール型ボール運動单元における戦術学習の効果. 和歌山大学教職大学院紀要: 学校教育実践研究. 2017;1:45-54.
- 36) 松永光曜, 倉田伸, 篠崎信彦, 呉屋博. 児童の課題発見・解決活動を促す動画比較を活用した授業実践. 教育実践総合センター紀要. 2017;16:357-67.
- 37) 横井克哉. 運動することが楽しいと思える体育授業づくり-「できる」「わかる」「かかわる」を取り入れたバスケットボールの指導を通して-. 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集. 2017;8:71-80.
- 38) 石塚祥喜. 運動に親しむ子どもを育てる体育科の授業づくり-運動有能感を高めるための工夫を用いて-. 愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集. 2017;8:11-20.
- 39) 吉井健人, 大友智, 深田直宏, 梅垣明美, 南島永衣子, 上田憲嗣, et al. 体育授業における性差及び運動領域からみた運動有能感の検討: 小学校3年生児童を対象として. 立命館教職教育研究. 2017;4:43-50.
- 40) 吉井健人, 大友智, 深田直宏, 梅垣明美, 南島永衣子, 上田憲嗣, et al. 体育授業における運動領域及び年変動からみた運動有能感の研究. 北関東体育学研究. 2017;2(0):21-30.
- 41) 吉井健人, 大友智, 深田直宏, 梅垣明美, 南島永衣子, 上田憲嗣, et al. 小学校体育授業におけるタブレットPCの効果的な利用方法に関する検討-個人種目を対象にして-. 群馬大学教育実践研究. 2016(33):247-54.
- 42) 外山良史, 水落芳明, Yoshifumi T, Yoshiaki M. 小学校体育学習における学習者相互の継続的フィードバックが運動有能感に与える影響に関する事例的研究. 上越教育大学教職大学院研究紀要 = Bulletin of Teaching Profession Graduate School Joetsu University of Education. 2016;3:111-9.
- 43) 工藤美波. 小学校体育科における運動有能感をもたらす授業づくり. 山形大学大学院教育実践研究科年報 = BULLETIN OF PROFESSIONAL SCHOOL OF EDUCATION YAMAGATA UNIVERSITY. 2016;7:80-7.
- 44) 吉井健人, 大友智, 深田直宏, 梅垣明美, 南島永衣子, 上田憲嗣, et al. 小学校体育授業におけるスポーツ教育モデルの有効性の検討. 北関東体育学研究. 2016;1(0):21-32.
- 45) 村瀬浩二, 定國あゆみ, 小坂竜也. 児童の共感性を高める体育学習の研究: 体づくり運動に着目して. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要. 2015;25:137-44.
- 46) 西口舞, 池田拓人. ポートフォリオを活用した小学校体育授業の実践: 運動有能感に及ぼす影響に着目して. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要. 2015;25:113-20.
- 47) 高田俊也, 大西隆博. 集団連続馬跳びを用いた実践における社会的行動目標達成に着目した事例的研究. 次世代教員養成センター研究紀要. 2015;1:117-26.

- 48) 近藤和久, 周東和好, 伊藤政展. 中学校の体づくり運動における長なわとび運動が生徒の集団凝集性と運動有能感に及ぼす影響. 上越教育大学研究紀要. 2015;34:265-74.
- 49) 松葉大吾, 水落芳明. コーディネーショントレーニングが学習者の運動有能感に与える影響についての事例的研究. 上越教育大学教職大学院研究紀要. 2014;1:179-88.
- 50) 上家卓, 中道莉央, 神林勲, 石澤伸弘, 森田憲輝, 奥田知靖, et al. 小学生における体育授業への苦手意識に関する研究 : 運動有能感に着目して. 北海道教育大学紀要 教育科学編. 2014;64(2):101-9.
- 51) 井上寛崇, 岡澤祥訓, 小畑治, 石川元美. 運動有能感を高めるベースボール型ゲームの授業づくり —ティーボールの実践をもとに—. 教育実践開発研究センター研究紀要. 2013;22:149-56.
- 52) 村瀬浩二, 梅澤秋久, 安部久貴. 小学校体育授業において教師に望まれる行動 : 運動有能感との関連による検討. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学. 2013;63:17-25.
- 53) 近野巧. 運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり : 統制感と教師のフィードバック行動に着目して. 山形大学大学院教育実践研究科年報 = Bulletin of graduate school of teacher training Yamagata University. 2013(4):74-81.
- 54) 田島芳隆, 西田順一. 中学校体育授業における運動有能感に及ぼす動機づけ雰囲気の影響 —原因帰属様式を媒介とした検討—. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編. 2013;48:145-58.
- 55) 續木智彦, 上野敦史, 園部豊, 高井秀明, 西條修光. 小学校高学年児童における自尊感情と運動有能感, 身体的自己評価及び新体力テスト結果との関連. 日本体育大学紀要. 2012;41(2):139-44.
- 56) 橋本健夫, 川越明日香, 谷山麻香. 児童の学習意欲の喚起と授業実践. 長崎大学教育学部紀要:教科教育学. 2012;52:11-9.
- 57) 近野巧. 運動有能感を高める小学校体育科の授業づくり : 教師の言葉がけに着目して. 山形大学大学院教育実践研究科年報 = Bulletin of graduate school of teacher training Yamagata University. 2012(3):242-5.
- 58) 梶尾徹, 橋爪和夫. 小学校の体育授業における教師や仲間の言葉がけと運動有能感との関連. 教育実践研究 : 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要. 2012;6:107-15.
- 59) 黒澤邦夫, 服部晃. 2E6 小学校低学年における縄跳び遊びの授業づくりに関する研究 : 内発的動機付けを高めるための指導者のあり方(課題研究 教師教育・教員研修, 教育情報のイノベーション〜デジタル世代をどう導くか〜). 年会論文集. 2011;27:230-3.
- 60) 尊鉢隆史. 小学校体育授業におけるリレー競技の指導. 研究紀要. 2011;12:67-74.
- 61) 上江洲隆裕, 岡澤祥訓, 木谷博記. 教師の言語活動による「継続的フィードバック」が技能成果、運動有能感に及ぼす影響に関する研究 —走り幅跳びの授業実践を通して—. 教育実践総合センター研究紀要. 2011;20:159-66.
- 62) 上野耕平, 関耕二. 性および発達差が児童・生徒の体力と運動有能感の関係に及ぼす影響. 山陰体育学研究. 2011;26:13-8.
- 63) 大場渉. 体育における学習意欲プロセスモデルの検討. 日本教科教育学会誌. 2010;33(3):21-30.
- 64) 高橋清孝, 西野明. 体育における学習意欲向上に関する実践的研究 : 学習意欲向上プログラムの作成とその有効性の検討. 千葉体育学研究 = Chiba Journal of Physical Education. 2010;33:11-21.

- 65) 小畑治, 岡澤祥訓, 石川元美, 森本寿子. 体育授業における「かべパスバスケットボール」の有効性の検討 ―ゲームパフォーマンス及び運動有能感の視点から―. 教育実践総合センター研究紀要. 2010;19:119-27.
- 66) 新富康平, 中田富士男, 小原達朗, 木下信義, 呉屋博. 運動有能感を高める体育の授業の工夫 ～長距離走の授業実践～. 教育実践総合センター紀要. 2010(9):197-206.
- 67) 相澤裕昭, 大友智. 小学校体育授業における指導プログラムの開発に関する研究 ―優れた指導プログラムの実践場面への修正観点の検討を通して―. 群馬大学教育実践研究. 2010(27):119-28.
- 68) 松本大輔, 細江文利, 鈴木直樹, 田中勝行. 「授業の内からのアプローチ」による運動有能感. Japan Journal for the Pedagogy of Physical Education. 2009;25(1):1-13.
- 69) 高瀬淳也, 石田譲. 体育授業を通して運動有能感を高める事例研究. 釧路論集 : 北海道教育大学釧路校研究紀要. 2008;第40号:151-5.
- 70) 北見裕, 吉野聡. 器械運動の授業における教え合い学び合い活動が生徒の運動有能感に及ぼす影響 : 中学校体育における実践事例の分析を通して. 茨城大学教育実践研究. 2008(27):77-90.
- 71) 宮本純, 平野智之. 運動有能感に着目した短距離走授業の実践研究―中学3年生を対象として―. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要. 2008(31号):55-62.
- 72) 井上寛崇, 岡澤祥訓, 元塚敏彦. 体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究 ―運動有能感の高い児童生徒の視点から―. 教育実践総合センター研究紀要. 2008;17:103-11.
- 73) 小畑治, 岡澤祥訓, 石川元美. 運動有能感を高める体育授業に関する研究 ―フラッグフットボールの授業実践から―. 教育実践総合センター研究紀要. 2007;16:123-30.
- 74) 岡澤祥訓, 柳沢隆裕, 有馬一彦, 本井健一郎. 運動有能感を高める評価法に関する研究. 教育実践総合センター研究紀要. 2003;12:163-7.
- 75) 賀川昌明, 横田直樹. 小学校高学年児童の自尊感情と体育授業における価値観及び運動有能感との関連. 鳴門教育大学研究紀要. 2003;18:9-18.
- 76) 岡澤祥訓, 辰巳喜之, 竹住和宏, 河野成伸. 体育授業におけるスポーツチャンバラの有効性の検討. 教育実践研究指導センター研究紀要. 1999;8:81-8.